

第5回香川県高P連研修会を開催 !!

『 3.11を学びに変える 』

2023/09/16

9月16日(土)、レクザムホール多目的大会議室において、第5回高P連研修会を開催しました。今年度は、全国高P連大会が宮城県で開催され、香川県高P連プランとして3か所での防災研修を実施してきたことを踏まえ、防災研修の仕上げとしての講演会を実施することとしました。講師は宮城県女川第一中学校元教諭で、現在は一般社団法人 smart Supply Vision 特別講師として全国的に講演活動を展開されている佐藤敏郎氏です。研修会には保護者75名、教職員等30名の計105名が参加しましたが、学校や組織の防災体制の改善に興味・関心のある有志の生徒や職員も10名参加しました。

司会は高P連副会長の入門美穂高松高校PTA会長が担当しました。また、当日はより多くの会員の皆様に視聴していただくために、オンライン配信も行いました。

最初に、杉本高P連会長が挨拶と講師紹介をした後、佐藤氏の講演会が行われました。以下は、佐藤氏の講演内容の要旨です。

【講演要旨】

私は宮城県の石巻市に生まれ、震災の時は女川第一中学校で教員をしていた。女川は海と山に囲まれた港町。3月11日は卒業式前日で、みんなで卒業式の準備をしていた。私は職員室でプログラムの準備をしているとドーンと突き上げるような揺れがきて、すぐに火花が散って、停電になった。これまで避難訓練は校内放送を使ってしていたが停電のため放送は使えず、全校生徒はバラバラの場所において、3年生は帰った後だった。体育館の脇を通過して校庭に避難する訓練をしていたが、ガラスが落ちてきて通れない。大きな地震が来れば絶対にそうなる。そういう想定をした訓練は一度もしてこなかった。2時46分地震が発生、3時22分には港に水が入ってきた。数分後、おもちゃのように町が流れていった。中学校にも町民が逃げてきたが、学校よりさらに高い裏の山に逃げた。津波は避難階段よりはるかに高いところまで来た。駅前の市街地が瓦礫に埋もれ、電車が墓地の上に転がる壊滅状態。住民は約1割の人が亡くなった。

生徒がこんな絵を描いた。滅茶苦茶になった町を子どもたちは見ている絵。子どもたちはスコップを背負って、手をしっかり繋いでいる。一人じゃない。私が12年間話しているのは、この絵のおかげだと思っている。

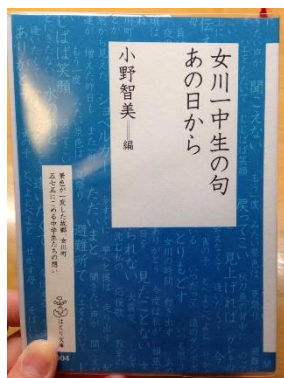
学校を再開することになった。県は4月21日以降の再開を決定したが、女川では例年通り4月の初めから学校を再開した。瓦礫に埋もれた街に丘の上から子どもたちの声が降り注ぎ、どれだけ町の人を勇気づけたか計り知れない。

学校が終わって帰るのは避難所。赤の他人と雑魚寝をする生活が長い人は11月まで続き、この現実はどう向き合わせて次のステップに進ませたらいいのか、そこに一番心を砕いた。5月。国語の授業で俳句を作り素直な気持ちを五七五にするプロジェクトに取り組むことになった。生徒には何を書いてもいい、書きたくない人は書くなと言った。「始め」といった瞬間の子どもたちの姿、魔法がかかったかのように鉛筆が動き始めた。指折り五七五を数え始めた。私の授業でこんなに集中した生徒は見たことがない。



まだ、瓦礫だらけの中、「故郷を奪わないでと手を伸ばす」。「ただいまと聞きたい声が聞こえない」は説明が要らない。「見上げればがれきの上にこいのぼり」は写真よりもはるかに想像できる。お姉さんを亡くした子は、「みんなの前笑えてるかな自分の顔」と詠んだ。窓からは未来が見えると詠んだ生徒がたくさんいた。「窓ぎわで見えてくるのは未来の町」。今、女川の町は瓦礫がなくなり、道路ができて賑わいが生まれています。子どもたちには未来が見えていたんだと思う。「夢だけは壊せなかった大震災」と読んだ少年もいた。みんなの合言葉、標語のようになった。みんなが覚えた。母親を亡くした女の子は、「逢いたくてでも会えなくて逢いたくて」と書いてきた。

半年後、同じ授業をした。無理だと思った文化祭ができた、久しぶりに兄弟げんかをしたなど回復してきた様子の句も多かったが、あの人が帰ってきた夢を見たと書いてきた生徒もいた。「逢いたくて」と詠んだ生徒は、「受験生 私の夢を届けるために」と詠んできた。「かなえる」ではなく「届ける」という言葉を使っている。これらは本になり、教科書にも載った。今でもこの授業は続いている。彼らが高校生になった後、座談会をすると、「あの授業で震災のことをはじめて言葉にした。私は言葉を失っていた」と言っていた。ほぼ全員が津波のことを題材にしたが、「津波」「命」「死ぬ」「犠牲」という言葉は使っていない、「逢いたい」「ありがとう」「青空」などの言葉に置き換えている。また、プリントにすると何十人分も共有でき、私は一人じゃないって思えたり、互いの違いを認めあうこともできた。孤立せず互いの違いや価値を認め合う、これは防災とか俳句に関係ない。どこの教室でも世の中全部で大事なことだと思う。



東松島も大きな被害が出たが、女川との違いは東松島は被害を受けた地域の子と被害のない地域の子が同じ教室にいること。だから学校もどっちに合わせていいかわからない。震災当時の小学5年生が中学3年生になった春に転勤したが、彼らは私に「あの体験は黙っていればただの嫌な思い出。言葉にしたらいろいろ分かって楽になった」、「それを発信して受け取った人は、何かに気づき何かが変わるかもしれない、悲しみを少しでも減らしたり、失わなくていい命を救うことにつながるのなら、情報として価値を持つ」と言った。彼らが高校生になり東京で話をさせたら注目を浴びて本になった。『16歳の語り部』。一番の仲良しを亡くした子は、「新学期、机が空いているのに誰もその話をしない。最初からいなかったかのよう。私も死んだほうがよかったのか。」と考えたとか、男の子は目の前を流されていった人が手を伸ばしてきたが、5年生の彼は手を伸ばせなかった。」など、誰にも言えなかった話を中3になって初めて語り始めた。生々しくみずみずしい語りで、この本はとっても貴重だと思う。



防災とは語り続けて忘れないこと。そうすると間違いなく人は備えて逃げる。あの日には辛いことばかりで、簡単に語り合ったり向かい合ったりできないかもしれないが、若者達と一緒に活動していると必ず未来の話、希望の話になる。あの日に向き合い必ず未来を見つける。学校や社会がやるべきことが見えてくる。あの大変な日に向き合ったその先に未来や希望を見つけられたらいいと思う。

女川第一中学校の卒業式は1週間遅れで、図書室でみんな着の身着のままで行った。その3月19日は忘れられない日。私の3人の子どもの一番下はみずほという小学6年生。もうすぐ卒業式で、式ではピアノの伴奏者になる予定だった。卒業式の3月19日、卒業式ではなくて火葬になった。これは火葬になった次の日。3月18日に早くも火葬してもらえたお礼にと考え、19日は、卒業式に出て制服も家も流された生徒に、「卒業おめでとう。頑張れよ。」ぐらいならできると考え必死になって学校に行った日。

娘が卒業するはずだった学校は石巻市の大川小学校。多くの子どもと先生が犠牲になった。

(動画による現地案内の一部)

「ようこそ大川小学校へ。今は壊れた校舎が立っているだけの寂しいところだが、ここには町があった。生活があった。命があった。子どもたちが走り回っていた。津波で校舎と校門だけが残った。校門が手を合わせる場所になった。ここは1年生と2年生の低学年棟。立っているところは、子どもたちが大好きだった中庭。こんなきれいな中庭があった。校庭には絵が描いてある野外ステージ。こっちは赤い屋根の体育館。校舎の2階からガラス張りのトンネルを通して入場していた」



5月の田植えが終わった日曜日に、運動会が行われていた。みずほは、その日曜日に生まれた。運動会がある日には朝早くに花火が上がるが、娘が生まれた日にお祝いに花火が上がったと笑った思い出がある。そういう場所に津波が来た。

ここは3.7km海から離れてる。2階の天井まで津波が来た。これは震災前の大川小学校、ここに北上川があり右側3.7km先が海。北上川からは200mもない。津波は川から来た。川を逆流してきた。すぐ先に大きな橋があり、橋に瓦礫や松の木が引っかかって、橋がダムのようにせき止められ溢れてきた。10mぐらいの津波になり。瓦礫も一緒に3時37分、この町を飲み込んだ。陸を遡上してきた津波もすごい勢いで、山にぶつかって渦を巻いた。かき回されて粉々になった。140軒以上あった町が学校と病院だけになった。津波はいろんな方向からくる。一波、二波、三波と何回も来る。



3月11日、12日は中学生と一緒に女川に泊まっていた。13日の午後、妻と息子が会いに来た。何キロも何時間も歩いてきた。妻は私の顔を見つめるなり「みずほの遺体があがった」と言った。娘の名前の後に「遺体」という言葉は想像していなかった。妻は伝えた後その場に泣き崩れた。何を言われたのか、何が起きたのかわからない。涙も出なかった。次の日小学校に向かった。泥だらけのランドセルが山積みになり、向かい側には泥だらけの子どもたちがブルーシートの下に何十人も並べられていた。みずほはその中にいた。呼べば今にも返事をしそうだったが、呼んでも呼んでもピクリともしない。涙だけが流れ、18日の火葬の日まで毎日娘は泣いていた。みんな知っている子たちで、笑顔で「おはようございます」って笑い合っていた子どもたちが並べられていた。70人死亡、4人は行方不明で、今日も探している。親が探している。12年以上経っても土を掘り続けている。

先生方も11人中10人亡くなった。こういうことにどう向き合っていけばいいのかわからない。何十年たってもわからないと思うが、こっちに進んでいけばいいんということは校庭に書いてある。

(動画による現地案内の一部)

「ここに「未来を拓く」という言葉が書いてある。瓦礫に埋もれても、ここだけきれいな色が残っていて、真ん中に「未来を拓く」と書いてあった。私にとっては暗闇に差し込んだ一筋の光だった。これは大川小学校の校歌のタイトルで合い言葉だった。これからもそうであればいいと思う。ここは悲しくて、かわいそうで、悲惨なところと言われるが、大川小学校ってどういう場所だって聞かれたら、あそこは「未来を拓く」場所と答えてもらえる状況を作りたい。家に帰ったら、あそこは未来を拓く場所だって



言ってほしい。そこから、広がる、つながることがきっとある。」

案内をした時、家に帰ったら未来を拓く話をしてほしいと言っている。この場所から未来を拓くには、やはりあの日の出来事に蓋をしないで向き合う、その先に見えてくるものは、ここから拓く未来。

あの日、学校で見つかった時計、町で見つかった時計は全部3時37分で止まっている。地震から51分後に津波が来たということ。海の近くの学校はすぐに逃げたが、海から離れた学校や高台の学校も多くは逃げている。周りは緩やかな山で子どもたちは毎年登り、3月にはキノコ作りをしていた。51分間時間があった。スクールバスが待機していて、会社から「津波が来るぞ、子どもたちを乗せて遠くに逃げろ」と、指示が出ていた。バスは動かず、運転手さんも犠牲になった。防災無線やラジオが避難を呼びかけ、迎えに来た保護者が「津波が来る、山に逃げて。」と言っていた。子どもたちも「先生津波が来るよ、早く逃げよう。」と訴えている。救う条件の時間、情報、手段が全部あった。また、県からは、地震が99%来るから備えろとよく言われていた。想定もあった。時間、情報、手段、想定全部あった。これは救えた命。簡単に救えた命。救ってほしかった命は救えた命。子どもを救いたくない先生はいない。必死になって守ろうとしたはず。救ってほしかった命があって、救いたかった命があって、それは簡単に救えた命。でも、救えなかった命になった。これをかわいそうだから、辛いからもうやめようとか、頑張ったから仕方がないなんて終わらせたら、あの日の子どもの先生の命が無駄になる。未来につながらない。

これだけ条件があっても救えなかったということは、これらは命を救うすべての条件ではないということ。山は命を救わない。命を救うのは山ではない。山に登るといふ行動が命を救う。時間がいくらあったって、親が逃げようって言ったって、それが行動に変わるかどうか。学者がいくら研究してハザードマップを作っても、ハザードマップは津波を止める壁にはならない。これをどう読んで、避難に繋げるか、行動に繋げるか、これを結び付けるのが防災。あの日は時間があり、学者が研究し、逃げようと言った人もいた。それが行動に繋がってれば、全然違う未来が来ていた。備えること、考えること、準備することで、未来が変わる。防災は未来を変える大事な作業。

2時46分に地震が発生し、子どもたちは先生と一緒に校庭に整列した。間もなく大津波警報が出たが、校庭にとどまっていた。3時32分、北上川の脇の富士川が最初に溢れてきた。それで逃げた人も助かっている。3時35分に家を出た人は助かっている。3時32分以降山に逃げ込んだ人たちは校庭に子どもが並んでいたと証言している。動き出したのは津波が来る1分前。1分でも2分でも山に向かって走れば助かっていたが、最後の1分で向かったのは山ではなく、橋のもと。津波は橋から溢れてきた。津波に向かって1分進んだ。校庭を出て駐車場を回って民家の間に入っていったが、そこは行き止まりだった。細い道路の行き止まりにどんどん追い詰められ、なかなか進まない時に津波が来た。向かった方向から、瓦礫や建物を巻き込みながら。



子どもと先生が抜けていったところは幅約70cmのフェンスの隙間。5、6年生が先頭で一列になり、3、4年生が続く。先生方は「逃げろ、逃げろ」ってやったはず。1分間で全員通して向かったところへ津波がきた。津波を見た瞬間、先生はどんなことを思ってどうしたか。100%想像だが、100%わかる。8m、9mの瓦礫と一緒にくる津波を見た瞬間、「あっ、俺は子どもを守れない」って思ったと思う。そして、子どもたちを抱きしめたはず。それしかできないし、それが教員。

私はそこから一生目を背けないことに決めた。考え続けて答えは出なくても。学校の目の前で子どもたち

を抱きかかえたまま先生方が流された。これは目をそらしてられないと思った。同時に、いくら子どもたちを強く抱きしめても、1分では無理、一列では無理だということにしっかり向き合いたい。そして子どもたち。校庭で寒かったと思う。怖かったと思う。「逃げよう」と訴えている。山に向かって走りかけていたが、待ちなさいと言われ、寒い中待って、立ち上がって向かった先から津波がきた。ここを出てくる子どもたちの姿は簡単に想像できる。おびえて、ベソをかいて、誰かの名前を呼ぶ子どもがどんどん出てくるところを想像してほしい。そして、その想像した中には自分を入れてほしい。自分の大切な人や家族がここから出てくるとしてほしい。その表情も思い浮かべられた人は必ず、これは何とかしなければだめだ、死にたくない、死なせたくない、って思うはず。それが防災意識。防災意識の本質は「死にたくない、死なせたくない」ということ、それだけ。



宮城県は99%津波が来ると言われ、私も避難訓練もやり計画も立てたが、ハザードマップばかり見て登場人物に血を通わせるということをやっていなかった。自分の大切な家族、娘の顔は思い浮かべたこともなかった。人ごとの、机の上の防災をやっていた。災害で自分や大切な人がこの世からいなくなるとは考えられない、怖くて。恐怖は煽れば煽るほど、考えるのを止めてしまう。ここまでは来ないだろうとか、自分は大丈夫だとか、そこから考え始めるので自分ごとにならない。防災は死ぬためにやるんじゃない。恐怖や悲しみのためでもない。死なないため、助かるためにやる、だからハッピーエンド。大切な人や自分が助かるところまで想定する、そしたら楽しくてしょうがない。希望の防災。ハッピーエンドから逆算して今やらなければならないことをやり、知るべきことを知る、それが防災。私たちの恐怖や悲しみはその材料になればいい。防災をしなければ恐怖は恐怖のまま、悲しみは繰り返される。恐怖を目的ではなく、材料として希望に結び付ける。恐怖は防災によって希望に変わる。

岩手県釜石市の釜石東中学校と鶴住居小学校。中学生が小学生の手を引き小中学生も近所の人も助かった学校。中学生と小学生と一緒に逃げている。先生や小・中学生に話を聞くと同じことを言っていた。パニックだったと。いざという時に判断、行動できる力を身に付けるのは無理。まともな判断はできないと思って考えないといけない。石巻市の門脇小学校も大変な被害にあったが、子どもたちはすぐに逃げている。親への引き渡しも山の上。何のトラブルもドラマもない避難をしている。警報から避難まで決めることはたった3つ。「逃げるかどうか、どこへ逃げるか、逃げろ」の3つを決めればいい。この判断のための時間と情報



が足りないのが緊急時。大川小学校はパニックになって判断ミスをした。門脇小学校が早く避難できたのは普段から決めていたから。逃げるかどうか、どこに逃げるか決めていけばすぐに逃げられる。大川小では「山に逃げよう」と言う先生がいたが、大丈夫だという先生もいた。まとまらなかった。「警報出ないのに、なに勝手なことを」って咎められ、子どもたちも怒られた。ボタンのかけ違いがあったが、決めておけば関係ない。あの時大事だったことは全部普段の中にあった。

大川小学校は裁判になった。判決では、あの日判断ミスをした先生は全く責められず、あらかじめやっていたかどうか問われた。宮城県から言われて、海や川沿いの学校には津波対応マニュアルがあった。大川小学校にも「近くの空き地か公園に逃げる」というマニュアルがあったが、学校の周りには空き地も公園もない、そういうマニュアルだった。引き渡しのルールも誰も知らない。それが教育委員会に提出され、戸棚に入っていた。命を守るためではなくて、提出するためのマニュアル。とても他人ごとではない。

きちんとしたマニュアルを備えず、あの日も決められずにパニックになり、判断ミスをしたという学校はたくさんある。たまたま津波が来なかったので助かったが大川小と同じ。念のために、津波が来ないけど逃げたとか、津波が来るはるか前から逃げましたってことにしないといけない。それは防災だけなのか。学校だけの問題なのか。

想定外の場合の判断と行動というのはすごく簡単、念のためにということ。津波は時速36キロ、走ったら絶対間に合わない。あの時助かった人は念のために行動した人。そのためにはギアを入れること。その瞬間、早く、高く。学校のギアは早く、高くに決まっているでないといけない。念のためのギアは大川小学校には準備されていなかったか、すぐに入れられない、探さなければわからないギアではなかったか。備えるべきものはすぐに入れられる念のためのギア。大川小の事故を受けて、文科省や教育委員会は分厚い通達を出し研修会も増えた。形だけの形骸化した細かいマニュアル、会議、通達、指針、それが子供の命を見えなくしてはいないか。これはやめるべきだと思う。もっと、楽しく学び遊んだ学校があり、それが突然なくなったという事実に向き合うことだと思う。

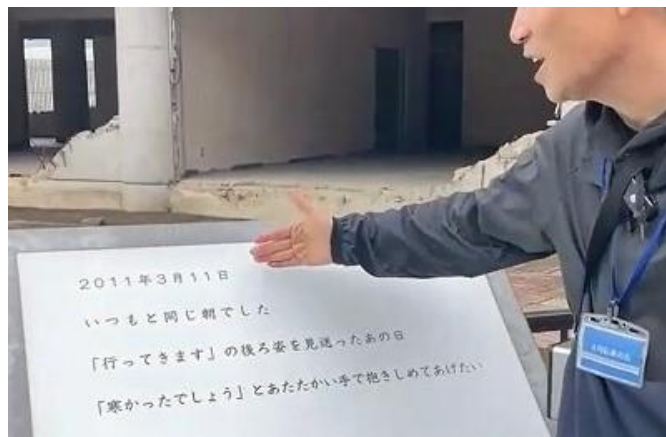
(動画による現地案内の一部)

「今、ここは特別な場所になった。“あの大川小学校”って言われる。あのではない日々を忘れたくないし、伝えていきたい。ここは、子どもたちが走り回った場所。歓声を上げた場所。ここにどんな風景があって、どんな日常が、どんな子どもたちがいたのか、それを伝えることができれば、あの日に何がありあの日からどんな日々だったかはきっと伝わる。それを踏まえてこれからのことを考えていけばいい。」

「あの日はいつもと同じ朝だった。「行ってきます」の後ろ姿を見送ったあの日、4行目は「寒かったですよ」と抱きしめてあげたいという言葉になった。この行と行の間、いろんな思いや言葉が入るんだろうって思う。」

こうすると念のためのギアがはるかに上がる。いろんな文章とか入れて感じるよりもこっちの方がいいと私は思っている。

訓練やマニュアルは本番があるということ。停電になるとかがラスが落ちることは想像



できなかつた。何十回も何十年も避難訓練をしてきたが、一回も失敗したことがない。訓練や練習は本番のために失敗を繰り返すはず。避難訓練の本番というのは命がかかっている。完璧な訓練、完璧なマニュアルはないし、できないと思うが、本気になることはできる。自分の学校を考えてほしい。トランシーバーはどこにあるか。停電で放送は使えない、携帯電話もつながらない時はトランシーバー。私の学校では全部鍵を閉めて戸棚の中にしまっていた。震災後は全部表に出した。ラジオとトランシーバーはピンク色のポケットに入れて、職員室に貼って置いている。いつも見れる、いつも気になる、それが防災意識でなければならない、習慣とはそういうこと。

私が震災後一番変わったのは、命の見え方、言い換えれば生徒が命に見えるという感覚。生徒は命なんだと思うようになった。それまでは生徒だと思っていた。漢字の苦手な生徒、給食を大量に食う生徒など。震災後、避難所から着の身着のまま子どもたちは毎日学校に来ていた。子どもたちがここにいるということは、朝起こしてご飯を食べさせて服着せて、「行ってらっしゃい」と言う人がいる。そして「ただいま」を待っている。生んで育ててくれた存在があったからここにいる、だから子どもたちは頭のとっぺんから足のつま先まで命。命がランドセルを背負って来て、命が教科書を開いている。そう思えるようになった。防災意識っていうのは命をどう見るかということ。垣根を越えて命の話をしたというのが私が思い。垣根はい

ろんなどところにある。教育委員会という垣根はなかなか向き合ってくれない。

娘は習字が大好きで、習字道具入れを開けると「旅立ち」という字がたくさん出てきた。亡くなる前一生懸命書いていたのが「旅立ち」だった。それは私たちへの大切なメッセージになった。今悩んでいることや目標にしていること、頑張っていることの本当の意味や役割はずーっと先にある。なかなか鍵が開かない、伝わらないが、それは簡単にできるはずがない、だから、叩き続けノックし続ける、そしたらいつかカチャッと開くかもしれないし、開けるのは私ではないかもしれない。

あの日、あの橋のたもとから町を見て、この瓦礫がなくなる日が来るイメージは湧かなかったが、瓦礫はなくなって「大川伝承の会」ができ、現地にたくさんの人が見学に来ている。

(動画による解説の一部)

「今、生きているこの日々、震災で亡くなった2万人の人たちが生きていたであろう、生きたくてしかたがなかった、生きたかった日々を私たちは生きている。」

多くの人が花を植えに来て学校の掃除もしてくれる。ここは壊される予定だったが、みんなが向き合って、卒業生も僕たちの母校を残してほしいという発信を始めた。それが石巻市長に届き、2021年から市の正式な施設になった。そして、2020年、震災から10年目、宮城県の新任の校長先生は全員ここに来ることになり、講師を頼まれた。

2021年からは新任の先生方がここに来ている。2021年はあの時の6年生が大学を卒業した年。そして今年の1月は、文科省の研修会。全国の100人ぐらいの先生がここにきて私の話を聞いた。どうやったら伝わるんだろうと、扉を叩き続けたが、教育委員会も文科省も何とかしようと叩いている。少しずつ扉が開き始めている。始まったばかりだが見守ってほしい。

私の上の娘は27歳。中学生の時にこの震災に遭った。中学時代に、「震災でいつもの自分を失った、そしたら本当の自分がわかった」という不思議な作文を書いた。「いつかやればいい、誰かやってくれるだろうと寄り掛かって毎日過ごしていたら、寄り掛かっていたものがなくなってしまった。学校が滅茶苦茶になって、妹も突然いなくなった。その時初めて、今やりたいこと、やらなければならないことをやらなかったら後悔する」という作文を書いた。一番後悔しているのはあの日の朝のこと。妹に「お姉ちゃんおはよう」と言われても返さなかった。それが可愛い妹との最後の会話になった。最後の朝に「おはよう」を言わなかったことをこんなに後悔したことはないと言っている。

失わなくても、泣かなくても、絶対に気づくべきことは日常が大事であるということ。防災とは「ただいま」を必ず言うこと。どんなことがあっても家に生きて辿り着いて「ただいま」を言って、また「行きます」と言う、その繰り返しが防災。辿り着きたくなる家、会いたくなる家族、それが防災の原点。

去年、静岡県沼津のサッカーチームの子どもたちに防災の話をしてきた。沼津は南海トラフ地震で大きな被害が出る。その子どもたちは、「町が津波で滅茶苦茶になるのはわかった。でも、次の日もこのメンバーで集まってサッカーをする。」と言った。これが防災。なぜ、私たちは防災をするのか、なぜ、生き抜かなければならないのか、それは未来に行くため。未来に向かうべきものがあれば、私たちは生きる。未来に向かう、だから生きる、それが原点。

12年後の若者たち、東松島や女川の子たちがさまざまな活動をして輪が広がり、多くの若者がいろんな



活動をしている。16歳の語り部の雁部君は災害社会学の研究者になっている。私の娘は映画を作る夢があり、大好きな故郷大川に震災のことも加えたドラマを作り、今各地で上映会が行われている。さまざまな場で、若者たちの活動の輪が広がっている。（講演終了）

講演の最後は、全国各地で佐藤氏と語り合い、一緒に活動してきた若者たちが成長し、伝承活動だけでなくさまざまな分野で活躍している姿を紹介していただきました。

その後質疑応答となりましたが、保護者だけでなく教育委員会や教職員、生徒など、さまざまな立場から多方面にわたる質問が相次ぎ、一つ一つ丁寧にお答えいただきました。



県高 P 連の前副会長からは、「被災された方に今、私たちができることは何か」という質問がありました。佐藤氏からは、「私たちの体験を材料にして同じような悲しみや後悔が繰り返されないことが大切で、私たちが体験し失敗したことが役に立っているという実感が持てることが一番。また、現地に来てもらったり講師に呼んでもらって交流することも大事で、震災後のボランティア支援はなくなったが、お花畑やガーデンを作る活動には何千人も参加しているので、たとえば大川小学校に来てガイドを聞いた後、ガーデンのボランティア作業をやり、石巻でおいしいものを食べて帰るというような交流をして、逆に香川に来てもらうような交流が繋がっていけばいいと思う。」と回答されました。

県教育委員会の先生からは、「高校生が修学旅行で石巻市など被災地を見学して勉強をするなどの交流とかがあれば教えていただきたい」という質問がありました。佐藤氏は、「東日本大震災は多くの地域が被害に遭っているので受け入れには連携が必要だが、「3.11メモリアルネットワーク」という共同体ができ、「大川伝承の会」など多くの団体が入っているので、たとえば門脇小学校や大川小学校を見てボランティアでガーデニングをするといったプログラムもできる。smart Apply Vision の「あの日を語ろう、未来を語ろう」では、『16歳の語り部』を書いた高校生と対話することもできる。」と回答された後、「若者たちは「今の子どもは3.11を知らない」といったネガティブな言い方をされるが、若者たちは逆に「知らないということは学べることで、僕たちは学べる世代なんだ」と言っている。子どもたちのコップは空っぽなのでいくらでも入る。逆に生きるために未来のために必要なものをちゃんとコップの中に整理して入れることができる世代だから、いわゆる3.11を「学びに変える」ことができる。3.11をいかに教材にして学びにしていくかが、これから我々が問われている。」と、未来に対する展望と強い決意を述べられました。

高校の生徒会長を務めている高校生からは、「高校生が防災について考えたり何か活動する時に、どのようなことができるか」という質問がありました。佐藤氏からは、「中高生は柔軟なアイデアを出せる。「まだ高校生」ではなく、積極的に働きかけるのが大事。想像力を働かせることも必要で、停電になった時のための放送を使わない避難訓練を提案したり、放送を使っても停電になったらどうするかと一言言うだけで全然違う避難訓練になる。私は失敗する避難訓練、想定外に出合わせる避難訓練を意図的に仕掛けることを提案しており、生徒会でそういうセクションを作って考えてはどうか」と回答されました。さらに、「震災時と避難訓練で全然違っていったことはどんなことか、という質問をすると、高校生や大学生は1分間で10個以上出てくる。避難訓練と全然違うから、少し想像したら「今のままではだめだ」と思うはず。たとえば、ある中学生の取組みでは、今ここで地震や津波が来たらどうなり、助かるためにどうするかを考え物語を作っていて、最後は必ず助かる、ハッピーエンドの物語を考えている。そうするとどこに逃げるか本気で考え

る。登場人物も血が通うようになる。いろいろなアイデアが考えられるが、まずは、小さいことから始めたい」と助言をいただきました。

ある高校のPTA会長からは、「希望に向かえなかった人や、今でも苦しんでいる方々のためにどんなケアがされているのか、また、災害弱者と言われる自力では逃げることができなかった人を救うための取組みやネットワークを教えてほしい」という質問がありました。

佐藤氏からは、さまざまな事例や経験を紹介されながら、次のように詳細なご回答をいただきました。

「あの日を語ることは未来を語ること、きちんと向き合った人は、その過程で辛く悲しいことがあっても、必ず未来に希望を語る。私も悲しいに決まっている。でも、それは乗り越えられるはずも、忘れられるはずもない。「よく乗り越えましたね」と言われるが、乗り越えているはずがない。娘の話をして悲しく辛いというのは、胸に娘がいる証拠。だからこの思いと一緒に生きていけばいい。そういう捉え方が大事だと思う。乗り越えられないし、辛いし、悲しいし、泣くこともあるが、その心にどう向き合うか、その過程できっと苦しむこともあると思うし、切り替えられない人もたくさんいる。それはそれぞれのペースでいいと思う。すぐにいろんな目標に向かう人も、少しずつ向き合って進んでまた戻ってもいい。正面から向き合ってもいいし、斜めから向き合ってもいいし、後ろ向きでもいい。それを受容する、受け入れる、ちゃんと耳を傾けることが必要だと思う。

女川中学校では全員被災者だから心のケアは全員必要だったが、学校に保健室の先生一人、週1回のカウンセラー一人で、全部任せるわけにいかない。やっぱりチームケアが大切で、学校にはぜひ提案したい。チームケアはすべての先生がカウンセリングマインドを持つということと、いろんな人がいろんな立場で支えてあげること。担任の先生だから、親だから言えない、でも若い先生だったら言えるとか保健室の先生だったら言えることもある。風通しを良くして、普段からそれぞれの立場で家庭とも連携しながら一人ひとりの子どもをみていく体制、少し工夫すればできる。

逃げ遅れた人については、それは念のためのギアを早く高く入れることが大切。津波三原則っていうのがあって、「想定を信じるな」と「率先避難者たれ」、最後は「最善を尽くせ」。最善を尽くすことが大事なことで、気仙沼の杉ノ下地区ではたくさん犠牲が出たが、そこは地域をあげて避難訓練を一番一生懸命やっていたところで、みんなで力を合わせて避難場所へ逃げたが、津波はそのはるか上に来てたくさん犠牲が出てしまった。記念碑には犠牲者の名前が刻まれ、「あなたたちの命は無駄にしないからね」と書いている。最善を尽くしたからそういうことを言う。大川小学校は本当に最善を尽くしたのか、事前のことも備えたあの日も。それがないとやっぱり後を引く、向き合いきれない、辛い日々が続くと思う。

人間だから完璧なことはできない。どんな学者でも100%の想定はできないと言っているが、本気になることはできる。本気でやるしかない。最善を尽くした、大川小学校も2階に上ったがダメだったということなら、少しは自然はすごいと思えたのかもしれないが、実質的にほとんど動いていない。だから親は納得が

いかないということになる。最善を尽くすしかないと思う。

高齢者や障害がある人たちを救うネットワークとか取組みに関しては、あの時車椅子ユーザーの子がいたが、その子は簡単に逃げた。いつもその小学校はみんなできちんと手順を決めていて、全く同じスピード、時間で避難場所に行けた。車椅子のせいで逃げ遅れたのなら車椅子がハンディになるが、車椅子は全然ハンディにならなかった。ハンディとは知らないこと、準備していないこと。車椅子そのものはハンディでも何でもなし。だからあらかじめ準備し想定すること。避難訓練でもそれは可能。どこの学校に



もある車椅子や松葉杖を避難訓練の時に実際に使ってみる、松葉杖の生徒を一人用意するだけでできる。学校の先生たちとオンライン講座をしていると多くの事例が集まってくる。あの時どこの学校でも何人が過呼吸になっている。興奮してパニックになって。避難訓練では過呼吸の想定なんて誰もしてなかった。これは十分想定に入れられる。特に小学生なんか絶対パニックになる、予想される生徒の反応を避難訓練でももっと考えるべきだと思う。いざという時には何にもできないと考えるのであれば、1個でも2個でも、1秒でも2秒でも何かサポートできることをあらかじめ考えておく。それで最善を尽くすことしかない。特に高齢者であるとか足が不自由な人がいた場合は、あらかじめそういうセーフティネットを作っておくしかない。」と大変丁寧にお答えいただきました。

ある高校の校長先生からは、「学校でも防災訓練を毎年行っているが、生徒たちの行動は訓練のための訓練であり、私自身もそこまで真剣になれない。人はどうして迫りくる危機に対して真剣に向き合わないのか、どうすれば向き合うようになるのか」という質問がありました。佐藤氏からは、「自分事にしたくない本能在働き、辛いことや面倒くさいこと、まして死ぬことなんて考えたくないから人ごとになる。自分は大丈夫だろうと思ってしまう。できる限り血の通った顔を思い浮かべて自分事にするということと、教育活動、教育計画を普段の教育活動・



学校経営とちゃんと連動させることだと思う。だから、計画のための計画ではなく、戸棚に入れるための提出のための文書ではなくて、避難訓練の計画もマニュアルも連動させてやるものにしていけば、きっとこの避難場所ではだめだとわかっていたはず。それは避難訓練だけではない。マニュアルにしても教育計画にしても実践と連動させるものを作ることが大切。それは校長先生の指示のもとだと思うが、学校には環境教育とかキャリア教育などさまざまな教育それぞれに重点目標がある。それで本当にいいのか、本当に子どものための子どもの命とか生きがいに直結する計画になっているかを見直すべきだと思う。自分ごとに置き換えられれば、みんな本気になる。それを、痛めつけられてから気づくのは遅い。私が体験したから言えるようになったが、体験するたび、体験した人しかわからないのでは駄目。だから私たちがきちんと真剣に受け取ってもらえるような伝え方を工夫しなくてはいけないと思う。」と回答されました。

質疑応答では、ご講演の内容をあらためて分かりやすく説明していただいたり、他の事例を紹介しながら内容を深めていただいたり、香川県の人たちにもできることや今後考えていくべきことなどについて助言をいただいたり、さらには防災や避難訓練といった枠を超えて学校教育全体の課題や展望などについてもお話いただきました。どのお話もウィットに富み、少しユーモアを交えながらも、真剣に熱く語られるお姿に会場は時間を忘れたかのように魅了されました。また、生徒や保護者だけでなく、教職員や地域住民などどんな立場の人にも、今後の生き方や考え方に大きな学びや示唆を与えていただいた講演となりました。

最後に、杉本会長から、「今日の講演の中には非常に大きな学びがたくさんあった。これから持ち帰ってこれからの防災に対する意識づけをしっかりと考えながら真剣に取り組んでいきたい。先生から「大川小学校は未来を拓く場所だ」と言っていたのだが、今日の講演は「未来を拓く」ための講演であったと思う。今日の講演をしっかりと活用し、これから我々も聞いた立場として伝えていきたい」との謝辞があり、講演会は大盛況のうちに終了しました。

講演会終了後、今回の講演会に関するアンケート調査を行いました。講演についての評価は「とても良かった」が97%、「よかった」が3%で、100%、参加者全員が肯定的な評価でした。

具体的な評価や感想を記述式でもお答えいただきました。その一部を紹介します。

(保護者)

- ・とても内容の濃い講演で、私の学校でも生徒に対して講演していただきたいと思った。(多数)
- ・すごく辛い体験をされた中で、語り部として活動されている先生の言葉がすごく心に浸透した。
- ・子どもたちの精神力がすばらしい。命の大切さ、日々の関わりを大切にしたいと思った。
- ・「訓練には本番がある」ということ、本気で訓練に向き合わなければならないと改めて感じた。
- ・毎日、「ただいま」を言い合える家族でいたい。
- ・「防災はハッピーエンドのために」という言葉がとても心に残った。
- ・香川では他人事のような震災だったが、涙を流さずには聞けないお話で貴重な経験でした。「ハザードマップでは命を救えない」という言葉が印象的で、行動に移さないと意味がないと実感した。
- ・現在の社会は想像力に欠けている。SNS の誹謗中傷や不登校、自殺まで。防災においても同じであることを今日気付いた。帰宅して家族に伝え、今後の生活における防災の準備をしたい。
- ・防災＝命を守る、日常を守る、笑顔を守るもの、人としての大切な責務であることを明確に理解できた。
- ・行ってきます、ただいま、大切ですね。これからもみずほさんと共に未来に向かって。応援しています。
- ・佐藤そのみさんの映画を学校でも上映してほしい。(多数)

(高校生)

- ・高校生である自分たちも防災訓練について考え直さなければいけないと思った。
- ・防災訓練の考え方などがよく分かり、自分が訓練する時に意識していこうと思った。
- ・1時間35分の講演と質疑応答のすべてが参考になった。防災意識も深く広いものになった。
- ・訓練やマニュアル、決まりを重視するあまり、命という本質が見えなくなっているというお話から、一番大切なものは何かを再認識することができた。テーマのとおり災害を悲劇で終わらせるのではなく、過去から未来への意味づけを行うことが大切だと知った。

(教職員)

- ・内容が具体的で示唆に富むものであった。感動を呼ぶ講演でした。
- ・お話しになる一つ一つの言葉が響いた。未来につながる防災、恐怖だけでなく前向きに生きるための防災を学校現場で展開したいと思う。
- ・「生徒が命に見える」との言葉の重み、教師の一人として本当に目からウロコが落ちるものであった。
- ・言葉にできない感情が溢れてきて、もっと心を込めた防災を考えようと思った。もっと多くの人にこの講演を聞いてもらおうべきと思った。

◎佐藤敏郎氏に講演を依頼したい場合は

<https://smart-supply.org/speakers/toshiro-sato/learn311>

の申込フォームからご相談ください。

また、佐藤氏と若者たちが作るプログラム「あの日を語ろう、未来を語ろう」については、

<https://smart-supply.org/speakers/toshiro-sato/with> をご参照ください。

佐藤そのみさんの映画上映会についても上記の申込みフォームにて相談してください。